

2016年5月7日(土) 著:岡本 悠

神の問答—超越—

太郎(たろう)は一人、不思議な感覚に囚われていた。  
和室の布団の中で、手が重くなるとか、足の感覚がおかしくなるのを感じた。  
そして、そのまま目を瞑っていると、  
何やら声が聴こえてきた。

神・お前はどなりたいのか？

太郎・誰ですか？

神・俺は神だ。

太郎・神？神様？

神・お前はどなりたい？

太郎・はい、僕は強くなりたいたいです。

神・どの位、強くなりたいたいのだ。

太郎・ボブ・サップより強くなりたいたいです。

神・ボブ・サップより強くなりたいたいのか？

太郎・というか、その強さという定義を超越する位、つまり強さを超越したいのです。

神・身長はどの位、高くなりたいたいのか？

太郎・身長も2メートルとかじゃなくて、身長も超越したいです。

神・体重は？

太郎・体重も超越したいです。

太郎・つまり、僕は全てを超越したいのです。答えに辿りつきたいのです。

太郎・答えが解れば、人生の意味や答えが解れば、もうゴールみたいなものじゃないですか。

神・そうか、太郎よ。お前は全てを超越して、答えに辿りつきたいのだな。

太郎・そうです。

筆者・ここで、ひきこもっている太郎が、家の中にいるだけで神から超越を含め、人生の意味・答えをもらうのは無理であろうと書いた場合、やっぱりこの話も答えは書いてないのだな。と狼狽(ろうばい)(うろたえる)する筆者である。

神・太郎よ。お前の考えはわかった。今から、その布団から出て、和室も出て、鏡の前に立ち、身長や体重を見てきてごらんよ。でかくなっているぞ。

太郎・本当ですか。

(太郎は布団を出て、和室を出て、鏡の前に立った。)

太郎・何も変わってないじゃないか。超越ってどういう事。神様はどうしたかったの？

神・いつか、この私、神を超越してみろ！！(終)

2016年5月12日（木） 著：岡本 悠

ミャンマー、ヤンゴンより、商売熱気と酒を売りたいがる少年

隆（たかし）は、日本から飛行機に乗り、タイで乗り継いで、ミャンマーについた。

お迎えでは、日本人女性のミャンマー人に日本語を教えている瞳（ひとみ）先生と、その日本語学校で習っているらしき、ミャンマー人の男の子がいた。

隆は、タクシーでミャンマーの首都、ヤンゴンのホテルに案内された。

ホテルの19階である。

隆は瞳先生とミーティングして、

「明日、日本語学校に伺います」と言った。

翌日、

ヤンゴンでは靴を履いている人などいなかった、隆は仕方がないので目立つが靴でヤンゴンの街の中を歩いた。皆がいろいろな物売り、ヤンゴンは熱気に溢れていた。

隆は「東京とは違う、本当の仕事の熱気があるな。」とワクワクした。

すると、一人の少年が店の中から、大きな酒瓶を持って「買ってくれ！！」と言う感じで近寄ってくる。靴や身長から言って、お金持ちと思われたのだろう。

「いや、いいよ。」

隆は買ってあげたい気持ちもあったが、若く甘かったのか、お金の札束が、日本円でいくらかなのか、瞳先生に聞かないとわからなかったのだ。

普通、日本ならここで終わる。

しかし、しばらく先を歩いていると、またさっきの少年が近寄ってきて、多分「少し、マケルから買って下さい。」

と来る。

隆は、店を飛び出してまで売りに来る少年に驚きを隠せず、逆にビックリしてしまったが、逃げるように断った。それでも、追いかけてきそうなので、逃げ切った。

隆は思った。「それにしても、凄い商売の熱気だな。ここならいくらでも働く気になるな。」でも、「日本のマグロ市場で怒られてやるとか、そういうのは無理だ。」

隆は2週間位、滞在した後、日本に帰ったが、しばらく何年も仕事場につけなかった。ただ、最近になって隆は、ミャンマーの商売の熱気やあの酒を売る少年の事を思い出した。

「デスクワークにしろ、俺には向かない工事現場にしろ、とにかく働かなきゃ駄目だ。自分はずは、出来る事からこなし、いまの職場で働くのだ。そのうち、もっとスタミナがついて働けるようになったら、自分を賄えるように働く事。そうしないと、本当にお金は底を尽きてしまう。働こう、自分に誓おう。働く事が一番大切だ！！」

隆は少し大人になったようだ。あのミャンマーのヤンゴンの街の熱気と酒を売るために追いかけてきた子供を思い出し、心の底から働いて自分を養おうと誓ったのだ！！（終）

2016年5月27日（金） 著：岡本 悠

## 京タコ屋

哲夫（てつお）は仲間達とキャバレーに行きました。  
すると、女性が奥から現れました。  
哲夫は「なんて美人なのだ。お名前は？」と聞きました。  
女性は「泰子（やすこ）です。」と答えました。

しばらく、哲夫は泰子のいる店に通うようになり、  
東京ドームの浜崎あゆみのライブと一緒にいく事になりました。  
改札口から泰子が現れました。  
哲夫は「会えたね。」と喜びました。  
泰子は「お腹空いた」と言いました。  
そして、泰子は指さして、「京タコ屋で買って、持ち込んで食べよう。」と言いました。

2人は開演から少し遅刻したようでした。  
飲食も禁止みたいな空気が流れていました。  
泰子はお腹が空いていたかもしれません。  
浜崎あゆみの白熱のライブ！  
皆に踊りを教えていました。  
東京ドーム中のお客さんが一体となりました。  
そしてエンディングは終わり、ライブは終わりました。

帰りの電車は同じ方向です。  
泰子は少し疲れているようでした。  
哲夫は空いている座席を見つけ座らせました。  
哲夫が先に渋谷で降りなければいけませんでした。  
哲夫は「まだ、居たい」とわがままを言いました。  
泰子は「駄目！」とそこは本当に突き放しました。  
「でもありがとう」と言って、お互い手を振って別れました。  
渋谷の改札の前の柱で若い哲夫はむせび泣きました。  
進められて髪の毛を茶髪にした思い出。  
一緒にスーパーや料理屋でロゲンカをした思い出。  
何より綺麗だった泰子。  
あの時の京タコ屋のタコ焼きはどうしたのだった？（終）